

9月ベラルーシの被災地へ

救援カンパと皆さんの思いを届けてきました！

チェルノブイリは終わっていない！と改めて実感…

今年もベラルーシの被災地へ皆さんから託された救援カンパ、子供達の絵、メッセージなどを届けてきました。今回の訪問では「救援関西の未来を担う」（期待の？！）若いメンバー、感性豊かで芸達者、個性的なメンバーがそろい、それぞれを持ち味を活かして、精一杯に各地で交流を深めてきました。20年を迎えようとしているベラルーシの被災地で、そこに暮らす人々の思いと生活、美しい自然に触れ、未だ消えることのない放射能汚染と様々な社会問題の一端を目の当りにして、ベラルーシの大地と人々に魅了されると同時に「チェルノブイリは終わっていない！」という厳しい現実を、それぞれに、改めて実感した訪問となりました。12月4日の「救援関西発足14周年の集い」では、現地のホットな様子を、ビデオ、スライドも交えて、皆さんにお伝えしたいと思いますので、ぜひ、ご参加下さい！

訪問にあたっては、たくさんの方から救援・派遣カンパを寄せて頂きました。また、港南中学の皆さんは「日本を紹介する絵」を託して下さいました。皆さん、ほんとうにありがとうございました。現地の方々からもたくさんのお礼のメッセージを預かってきました。

現地では、これまでの私達の支援活動やこれからの取組みについても意見交換をしてきました。「ミルク・キャンペーン」を、現地の人々のニーズに応じてその用途の範囲を広げるべく「子ども元気キャンペーン」に“リニューアル”したことについても報告し、現地の方々からも歓迎されました。また、昨年来、問題になっていた「救援物資の郵送」については、現地の税関チェックが昨年よりもさらに厳しくなり、残念ながらどの施設や

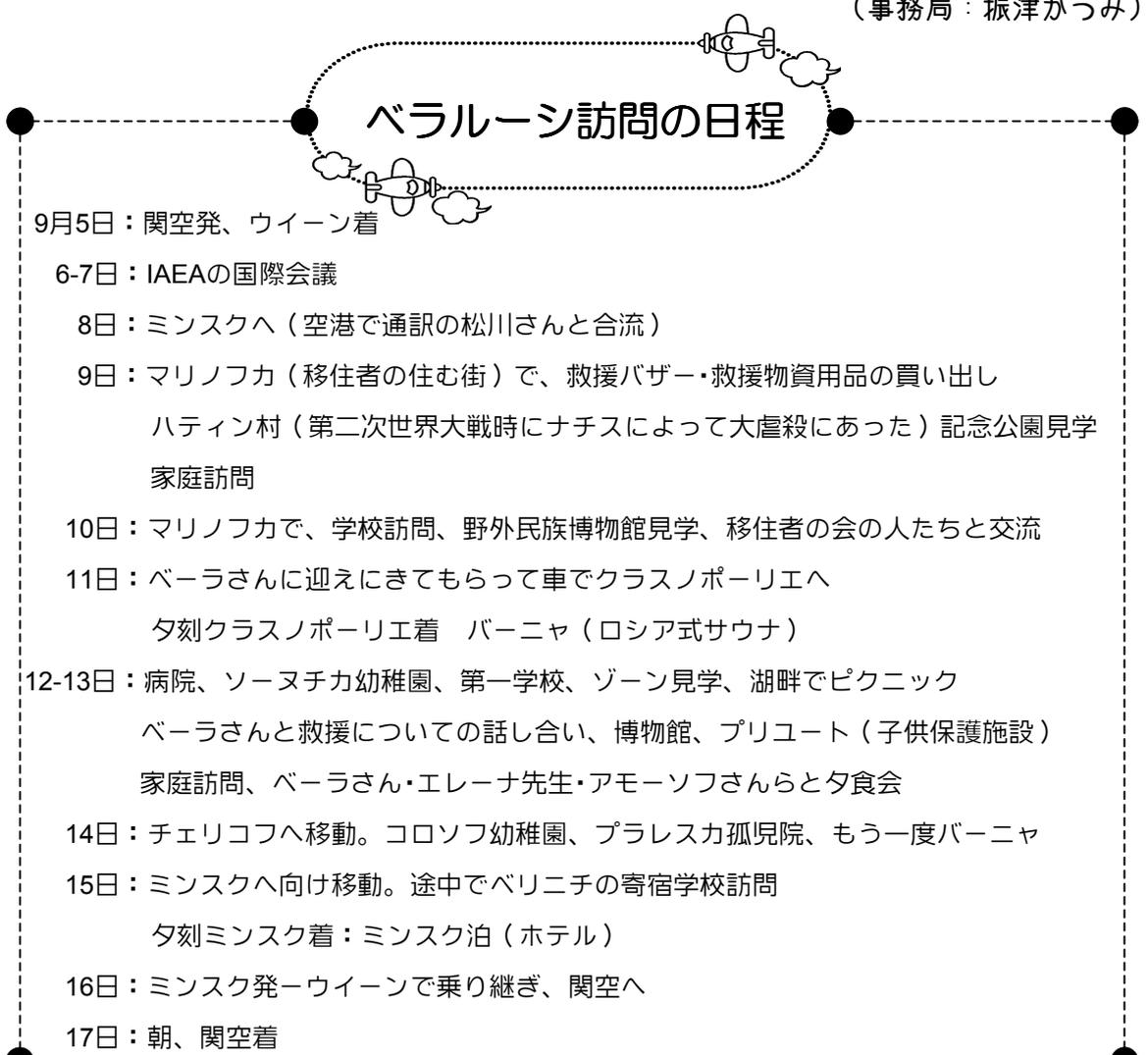


後列右から3人目のベーラさんと
右端のエレーナ先生

個人宛でも、もうこれ以上は続けられないことが明らかになりました。それに代わる「現地調達」(今年も昨年と同じく「試験的」なレベルで行いました)を今後、どのように展開してゆくかが課題です。

来年の「チェルノブイリ 20 周年」に向けた招待交流についての相談も今回の訪問の大切な「宿題」のひとつでした。相談の結果、汚染地クラスノポリエから小児科医ベーラ・ルソーバさんと、英語教師のエレーナ・グルディノーバさんに来日して頂けることになりました。4月26日「チェルノブイリ事故の日」の前後に、関西を中心に各地で様々な交流の場を持ちたいと思います。また被爆地広島や、多くの原発を抱える福井も訪れたいと思います。「広島・長崎、そしてチェルノブイリを繰り返さないで!」「チェルノブイリは終わっていない!」をともに訴え、ヒバク被害のない世界に向かって、これからも手を携えて進んでゆけるような交流にしたいと思います。今後とも、ご協力よろしくお願い致します!

(事務局：振津かつみ)



ベラルーシ訪問の日程

9月5日：関空発、ウィーン着

6-7日：IAEAの国際会議

8日：ミンスクへ（空港で通訳の松川さんと合流）

9日：マリノフカ（移住者の住む街）で、救援バザー・救援物資用品の買い出し

ハティン村（第二次世界大戦時にナチスによって大虐殺にあった）記念公園見学
家庭訪問

10日：マリノフカで、学校訪問、野外民族博物館見学、移住者の会の人たちと交流

11日：ベーラさんに迎えにきてもらって車でクラスノポリエへ

夕刻クラスノポリエ着 バーニャ（ロシア式サウナ）

12-13日：病院、ソヌチカ幼稚園、第一学校、ゾーン見学、湖畔でピクニック

ベーラさんと救援についての話し合い、博物館、プリユート（子供保護施設）
家庭訪問、ベーラさん・エレーナ先生・アモソフさんらと夕食会

14日：チェリコフへ移動。コロソフ幼稚園、プラレスカ孤児院、もう一度バーニャ

15日：ミンスクへ向け移動。途中でベリニチの寄宿学校訪問

夕刻ミンスク着：ミンスク泊（ホテル）

16日：ミンスク発ーウィーンで乗り継ぎ、関空へ

17日：朝、関空着

初のベラルーシ訪問—人々や自然に触れて

長は ^{みゆき} 幸

ベラルーシへ行って実際に現地の人々に出会い、自分の目で状況を捉えたい……これまでチェルノブイリや原発のことを少しずつ勉強してきましたが、いつも頭の片隅にこの思いがありました。今回、ベラルーシを訪問して、知識だけで見えていなかった部分がたくさんあることを実感させられると同時に、この国がより身近に感じられるようになりました。初めての訪問でスケジュールに呑みこまれそうになりながらも（？）、日本にいただけでは決して得ることができないものを肌で感じることができました。

まず、自然の美しさには到着したときからずっと感動していました。白樺の森や地平線まで続く畑、野生のきのはお話の中で見るような景色です。しかし、ゾーンを訪れたとき、目の前の自然が放射能に汚染



移住者の会の人たちと
ハイ・チーズ♪



くなかったのかもしれませんが。これまで見てきた風景と同じように美しいのです。意識の上では汚染されているのだと分かっているにもかかわらず、どうしても感覚として捉えきれ

ませんでした。人も村もなくなって、自然だけが美しく存在している光景に、何とも言えない物悲しさを感じ

ました。このとき初めて、私は「目に見えない」という真の恐怖を思い知ったような気がします。

幼稚園や学校の訪問、家庭訪問などを通じて、チェルノブイリ原発事故の影響が今だ続いていることがよくわかりました。事故の当時から状況も変化し、引き起こされる問題は必ずしも同じではありませんが、アルコールの問題や家庭の貧困など依然として厳しい状態にあります。そしてこれらの問題が多くの場合、複雑に絡まりあって虐待や育児放棄にもつながり、子どもたちに大きな影響を及ぼしていることが特にショックでした。今でも子どもたちの笑顔を思い出すといたたまれない気持ちになることがあります。決して「チェルノブイリ」は終わってなんかない、と改め

て認識しました。

今回の訪問で最も心を打たれたのはペーラさんやパーリャさん、ターニャさん、ジャンナさんをはじめとする、現地で救援活動の中心となっている方々の熱心さです。それぞれに問題や困難を抱え、日本に比べて遥かに活動もやりにくく、日常生活もある中で地域の子どものことや様々な問題を抱える家庭、移住者の方々のことを本当に真摯に考えておられました。彼女たちの、人々の力になりたいという思いと純朴さには感心させられ、尊敬するばかりです。また、私たちを非常に温かく歓迎してくれました。これは救援関西とペラルーシの人々との、これまでの信頼関係の上に成り立っているものだと思います。物質的な援助だけではなく、心の交流

の大切さも身に染みて感じました。

ペラルーシと日本、核による被害という悲しい事実を持つこの2つの国。一方で、それがもたらしてきた問題や、人々の苦しみが過去の出来事として忘れ去られようとしているのも事実です。戦争や核の恐ろしさを知らない世代が増えていく中で、ヒロシマ・ナガサキとチェルノブイリを結んで、私たちが自分の目で見てきたもの、考えたこと、感じたことをしっかりと伝えてゆく必要があります。たとえどんな形であっても、二度と起こしてはならない、人間が持つ負の側面の行為だから……。ペラルーシの人々との出会いを大切にしながら、今回の訪問を通して得たものをこれからの活動に活かしていこうと考えています。



現実化する放射能汚染



9月、私は初めてその放射能汚染地に足を踏み入れました。19年前の1986年、当



長沢 智行
時4歳だった私はヒロシマ原爆の約600倍分もの放射能が世界中にはらまかれたチェルノブイリ原発事故で、大惨事があったと知る由もありませんでした。

私が原子力に関係を持ったのは、他でもないヒロシマ・ナガサキとの出会いです。小学校での広島への修学旅行で被ばく者の佐伯敏子さんが被爆体験を語り終えてから、私たちにさらに語りかけました。

『ヒロシマは二度と繰り返しちゃいけないよ。ヒロシマに歳はないんよ。私は語り部を続けて居るけれども、この身はもういうことをきかんようになってきちよる。イトーテ、イトーテ。ピカドンがからだを虫歯むんよ。あなた達の子の世代まで語ることはできないんやと思うんよ。だから、あなた達にお願いがあるんよ。今度はあなたたちがヒロシマを次の世代にそして、その子がまた次の子に語りつぐようにしてね』

生きた心地はありません。心底、怖かったです。決心する以外選択肢はありませんでした。「語り継ぎます」佐伯さんに私は文章で返事を出しました。次世代にヒロシマを語り継ぐ目的は3つでした。二度と戦争をしないこと、二度とヒバクシャを出さないこと、絶対平和であることでした。11年前の1994年ことでした。

それから今日までに事態はどうなっただしょう。自衛隊イラク派兵、JCO 臨界事故と美浜原発事故でヒバクシャ発生、第3次小泉内閣発足で憲法改正がいよいよ現実化を増していました。極めて事態は悪化してきているのです。

そんなあり、振律さんから今回のベラルーシ訪問の誘いを受けたのです。同じヒバク国として人びとは原子力をどう捉えているのか、また汚染地とはどんな場所なのか、ヒバクシャはどういった立場にあるのかなど関心が高まり、私はベラルーシに行くことを決めました。



訪問で一番印象に残っていることは汚染地へ行ったことです。ベラルーシの豊かな穀倉地帯は汚染され、村があった跡として電線の



引かれていない電柱のみが残っていました。

野原に電柱だけが残っている…

セシウム

137のガンマ線の量は日本の8倍近くに跳ね上がりました。初めて現場で味わった放射能の恐怖はたしかにありました。こうした状況が日本にも起こる可能性が高まっているのです。考えるとやり切れなさを感じました。

現在、日本には原発が53基あり、フルサーマル計画も再スタートしました。原発事故やトラブルは毎年必ず報道されています。

チェルノブイリ原発事故から、日本は何を学んだのでしょうか？

まず、訪問で学んだことを伝えたいと思います。是非、報告会にご参加ください！



まだ終わらないチェルノブイリ

森下 なおや

初めてベラルーシの地へ降り立ったのは3年前のちょうど同じ頃。今まで、原発、チェルノブイリ、核の被害といろいろと勉強してきました。しかし、本を読んだり、話を聞いたりするだけでは、頭では理解できてもどうもしっくり来ない。これは、一回現地に行ってみないとわからない！ってことで振津さんのお誘いもあり、現地に行かせて頂きました。あれから、3年。日本ぼけしてしまった僕にもう一度ベラルーシを訪れる機会を与えてくれました。今回で2回目のベラルーシ訪問。またまた、12日間の長いようで短い旅の始まりです。実際に現地へ赴き、ペーラさんやパーリャさん、ターニャさんにジャンナさん、その他にもたくさんの人と触れ合う中で、ベラルーシが好きになりました。また、活動しにくい状況の中、頑張っている皆さんをすごく尊敬しています。そして、皆さんが現地で頑張っているからこそ、僕は、こつやっつベラルーシに行くことができるし、活動を続けていくことができるんだというのを強く感じました。

この訪問で一番思ったこと。それは、「チェルノブイリはまだ終わっていない」ということです。3年前に訪れたときと変わらない、いや、むしろ厳しくなっているんじゃないでしょうか。もうすぐ、事故が



ら20年を迎えようとしていて、IAEAは「チェルノブイリは終わった」という姿勢でいます。確かに状況は変わっていますが、決して生きやすい状況に変わっているわけではありません。増える病気、続く貧困、悪化するアルコール中毒。全部チェルノブイリだけが原因だとはいえないものの、チェルノブイリが1つの原因であり、大きな問題であると思います。チェルノブイリの事故がなかったら状況はもっともっと違っていたかもしれない。ペーラさんは言いました。「チェルノブイリのおかげで私たちは出会えることができた」と。皮肉なものです。僕は、ペーラさんたちに出会えたことをすごくうれしく思っています。だからこそ、すごく切なくてその言葉を聞いた時、涙がでせうでした。チェルノブイリつながる友情ではなく、出会えたことにつながる友情でこれからも付き合っていきたいと思います。

今年は、広島・長崎から60年。被爆者の平均年齢は73.1歳となり、直接の被爆体験者は、年々、少なくなっています。彼らの意思を継ぎ、彼らの体験・想いを語りつなげていくのは僕らだと思います。今や社会に生きる人々は核を知らない世代へと移行しつつあり、半世紀が経った今でも苦しんでいる人がいるこの事実を忘れてはいけないうし、過去のものにしてはならないと思っています。チェルノブイリも20年

が経とうとしていて、日本でもベラルーシでも風化しつつあるのが現状です。風化させてはならない。「チェルノブイリはまだ終わっていない」のだから……。もっともっとまわりに伝えていきたい。そして、少しでも多くの人に核の恐ろしさを知ってほしい。まだまだ言いたいことはあります。報告会に来て僕らの言葉に耳を傾けてください。よろしくお願いします。



今改めて思うこと ー被災者との交流の中から

松川 直子

ロシア語に携わっている関係で、今回のベラルーシ訪問が4回目となりました。訪問する場所は毎回少しずつ違うところはあるものの、ほとんど同じです。ただ、年数を経るにしたがって状況は変わってきています。ベラルーシの現地の皆さんの子どもさんが大きくなり、みんな年をとっていき（私もです…）、抱える悩みも変わってきています。振津さんが滞在中、口にしてた「（現地で活動している人たち）活動開始当初はこんなにうちとけて話をしてくれなかったけど、時をかけて信頼を築いてきた」という言葉がとても感慨深かったです。時とともに私たちの友情が強くなってきているのは大変嬉しい反面、時が経ってしまった分大きくなってしまった



問題、新たに生まれてきた問題も多々あります。毎回訪れる度に何か新しいことを発見するのですが、（当然のことを「再発見する」のかもしれませんが…）今回はそれをミンスクの「移住者の会」のメンバーとの会合で感じました。

ジャンナさん、ターニャさんを始め、以前にもお目にかかったことのある人、今回初めての人、20人弱の人が集まってくだ

さいました。休憩の時の話では「日本のお母さんたちが集まってもきっとこんな話をするんだろうなあ…、どこでも一緒だな」と思えるほほえましく和やかな会話が弾むのですが、一旦1986年当時のことや現在の不安などを語り始めると堰を切ったように止まりません。事故から20年近くが経ち、子どもたちも大きくなって孫がいらっしゃる方も少なくありませんでした。「移住者の会」リーダーのジャンナさんも2歳になるお孫さんがいらっしゃいます。そのジャンナさんの話されたことがとても印象的でした。「息子の嫁に子どもができたと聞いたとき真っ先に考えたことは『健康な子が生まれてくるんだろうか?』ということだった」という言葉です。ジャンナさんの息子さんのお嫁さんはミンスク郊外の生まれでいわゆる汚染地で



大虐殺のあったハティン村

育ったわけではありません。ご自身が障害をもったお子さんをお持ちだからかでしょうか、

「病院で『健康な女の子ですよ』と言われても自分の目で足の指の先から頭のてっぺんまで確かめるまでは安心できなかった」とのことでした。

きっとどんな人でも自分に孫が生まれると聞けば、喜びとともにお産への不安は感じると思います。それなのにチェルノブイリ事故の被害者の方たちはそれに加えて「事故の影響はないだろうか?」と余計な不安をかかえているのです。そんな不安が代々受け継がれていくのは恐ろしいことです。ここに放射能の恐ろしさがあります。核兵器や原子力発電所の事故の被害者は自分だけでなく、子ども、孫など子孫への影響があるのではないかという不安を抱えていかなければならない（実際それが不安だけで終わらない場合もあります）のです。大変な精神的負担です。不幸にも事故に遭って、実際にそんな不安を抱えて生活している人がいます。やはりその人たちの言葉には重みがあります。今年4月の「チェルノブイリ19周年の集い」の際の山科さんの言葉と同じ重みです。この言葉の重みを無駄にしないように、核の恐ろしさを伝えていかなければならないと決意を新たにしました。



チェルノブイリ被災19年目のベラルーシを訪問して

長澤由美

前代未聞の放射能の被災地の今の状況を知りたい、ベラさんたち、ターニャさん・ジャンナさんたちと課題について直に伺いたい、子ども達・青年達の思いも知りたい…。色々思っただけでしたが、「訪問目的」以前のカルチャーショックが印象的で新鮮だったので、まずはそれをお話します。

実は、私は絵本が大好きなのですが、ベラルーシの家も町も畑も人も自然も、絵本や物語にでてくるようなありさうで実際は今にはないと思っていた世界でした。地平線まで続く平原・深い森・一面のジャガイモ畑・多くのキノコと小動物・外壁をピンク、窓



枠をブルーに塗った煙突のある家・好きに歩きまわる鶏とグースと牛と馬。金髪碧眼の妖精みたいな子供達。不思議な光景ですが、はじめてなのになぜか懐かしく感じました。また、ソ連時代のマイナスの遺産についていつも語られるけど、質素だけどよく手入れされた家や働き者の農家の人々や学校を誇らしく語る子供達と出会い、マナーとプライドを維持するのが困難な日本を振りかえり、複雑でした…。「いい

とこやんか」。シビアな現状をしばし忘れて浸ってしまいました。汚染されたかれらの故郷はそのままなのに。

言葉の壁が難儀でしたが、それでも医師・教師・保母・その他地域で命と暮らしの最前線で奮闘している皆さんに会えて、いろいろなお話を聞くことができました。19年たつので、誰も声高に訴えること

はありませんでした。しかし、子供達の健康・年寄りの思い・働き盛りの死亡・アルコール依存・仕事の問題・政府が何事にも加える制限・差別・切り捨て・新たな被曝等、課題はかえって深刻になっているように感じました。

困難は、どこへ行き着くのか。今回、孤児院や子供達の保護施設・社会的入院をしている小児病棟を訪問する機会をいただきました。被災・経済的混乱・失業・アルコール・家庭の崩壊・社会経済支援の不足、どれも相互作用しますが、最後は子供たちの上に行くのではないのでしょうか。悶々。

最後に、困難はあっても、みなさんあつくて、暖かかったです。スパシーバ

被害を過小評価する IAEA に被災国の医師達が反発

ベラルーシ訪問に先立って、9月6-7日ウーンで、国際原子力機関（IAEA）が主催し、「チェルノブイリ・フォーラム」（IAEA,WHO,UNDP,UNEP,UNSCEAR,世界銀行,ベラルーシ・ロシア・ウクライナ共和国政府などで構成）と協力して開催した国際会議「チェルノブイリ：未来に向けた回顧—事故の影響と将来についての国連の共通認識に向けて—」に参加しました。会議の前日に発表されたプレスリリースは、日本の新聞でも「IAEAやWHOの専門家グループは5日、放射線被ばくによる最終的な死者数は約4000人と推計する調査結果を発表した。史上最悪の原発事故による死者数については、数万人～数十万人とするさまざまな推計があったが、これまでを大幅に下回った。」(毎日新聞9/6)と報道されました。(この数字の問題点については別の機会に譲ります) IAEAはこの会議を通じて「チェルノブイリの放射線被ばくによる被害はたいしたことはなかった」との国際的宣伝を「20周年」に向けてさらに強め、原子力利用を推進しようという狙いがあったようです。実際の会議の会場ではマスコミ報道にはあまり出なかったような議論も聞くことができと思いますので、とりあえずの印象ですが報告します。



<会場入口で原発反対署名に取組む NGO>

IAEAとしては「チェルノブイリの放射線健康影響は小児甲状腺癌とロシアの高線量被曝の事故処理作業従事者の白血病増加のみ」というのが主要な見解でした。「事故処理作業従事者の白血病」については、IAEAは「10周年」の時には言及してもいなかったもので、「新たに認めた」点ということになるかと思えます。しかし、他の癌や遺伝的影響については、「統計的に有為ではない」とか、「報告によって結果が異なるので評価が定まらない」とか、「被曝量や汚染レベルとの相関関係がみられないとか」…いろいろと理由をつけ、「放射線の影響と言えるものはない」と主張。循環器疾患などの癌以外の病気の増加は「社会精神的なもの」「ストレス」「貧困」「アルコール依存やたばこ」などといった生活上の問題であり「放射線の影響ではない」「不安をあおるような誤った情報がかえって人々の健康の悪化を引き起こしている」などと断言しました。現実に出ている被害を真摯に受け止めて検討するのではなく、「チェルノブイリのような低線量の被曝ではそもそも健康影響は出るはずかない」という考えが大前提としてあるようです。

これらの結論から導かれた今後の「支援対策」は、「貧困対策」「経済難からの復興」「生活スタイルの改善」「ストレスの軽減」などであり、現地の人々の「自助努力を促す形での具体的な支援」をするべきだということが強調されました。また、これまで「汚染地域」に指定されていたところも、「放射能測定をやり直した上でその指定をはずし、再居住や農業の再開、企業の誘致などをして経済の復興をはかるべきだ」ということが明言されました。しかし実際には、クラスノポリエなど、私達が支援をしているベラルーシの汚染地では、汚染レベルの測定もなされないまま「被災地の指定」がはずされ、施策がどんどん打ち切られている厳しい現状があります。被災3国の政府の代表者もIAEAやUNDPなどの見解を積極的に評価し、「とても効果的な対策だ」と歓迎する発言をしていました。このような動きは、現地での被害者切り捨ての施策にさらに拍車をか

けるようなものであり、私達としてはとうてい容認することはできません。

会議では、主催者側の報告者のほとんどがアメリカやフランスなど原子力推進国の欧米の研究者達で、唯一、ロシアの研究者としてパネリストになっていたY.イズラエル氏は、「被災3国からの今回の会議への参加者数が10年前の会議の時よりもかなり少ないことは問題だ」(旅費など経済的な問題もあるのでしょう)と不満を表明し、そんな中で「チェルノブイリは終わった」かのような「共通見解」で会議がまとめられようとしていることを批判しました。また、会議に参加した被災3国の医師や研究者達からは、討論の中でフロアから「**チェルノブイリの被害はこれからだ**」「**これでチェルノブイリ研究を終わらせるようなことをしてもらっては困る**」「**原子力エネルギーの問題も含めて真剣に考えるべきだ**」など、不満、反発と抗議の発言が続きました。

NGOでは、グリーンピースのメンバーが参加し、ロビーで汚染地の様子を撮影した写真展示などをしていました。討論の中でIAEAに異を唱える発言をしたグリーンピースの代表に対して、議長が「グリーンピースも(チェルノブイリの被害を必要以上に宣伝して)人々の不安をあおるようなことはやめてもらいたい」というようなことを言って、かなり失礼な対応をするような場面もありました。今回の会議でも日本の放射線影響研究所(放影研)が深くかかわっており、議長を前理事長のベネット氏が務め、最後はかなり強引にIAEAの主張でまとめました。「被爆60周年」という節目を迎えた広島・長崎にある放影研が、5周年、10周年に引き続き今回もヒバクシャをないがしろにするような役割を果たしたことは許されるものではありません。

会議でのプレゼンテーションとは別に会場では「健康影響」と「環境影響」についてのふたつの報告冊子が配布されていましたが、それらは会議でのIAEA主導の報告発表の内容とはかなりニュアンスが違うように思います。「健康影響」報告集はWHOの専門家グループが主体になり、現地の医師なども入ってまとめられたもので、2004年末くらいまでに国際的に発表されたチェルノブイリ関連の論文をかなり網羅しており、IAEAが無視しているような「影響あり」「影響が示唆される」といった内容の報告もそれなりに評価し、「今後も放射線の健康影響のリスクを考慮して調査研究を続けるべき」との勧告がされています。(詳細は別の機会に譲ります)

IAEAのこのような動きを批判し、欧米、日本、ロシア、ウクライナのいくつかの反原発団体、医師のグループなどが、「20周年」に向けてのさまざまな国際・国内的取組みの準備を進めています。私達も、これらの世界の動きや日本各地でのさまざまな取組みと連帯し、現地の被災者の方々をほんとうの意味で支援しつつ、「チェルノブイリを終わらせよう」としているIAEAなどの動きを批判し、対抗してゆけるよう、来年に向けて準備したいと思います。

(振津かつみ)



会場ひたたかむ振津さん

現地からのメッセージ

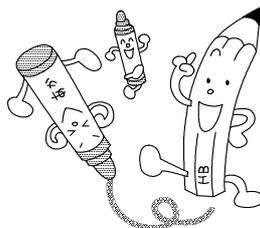
<絵を描いて託して下さいった港南中学校の皆さんへのメッセージ>

ソーヌチカ幼稚園

親愛なる日本の皆さん

ベラルーシのクラスノポーリエの子どもたちは、皆さんのおもしろい絵に感謝しています。いただいた絵は「日本・ベラルーシ友好コーナー」に展示します。

こちらにぜひ遊びに来て下さい。



ソーヌチカ幼稚園

コロソク幼稚園

親愛なる友人の皆さん

ベラルーシのチェリコフのコロソク幼稚園の職員と子どもたちは、皆さんの支援に感謝します。皆さんと、地球上の全ての人々の幸せと平和と友好関係を願っています。

友情をこめてチェリコフ

コロソク幼稚園

(訳：松川直子)

今回の訪問で現地に届けた支援カンパ

資金援助	クラスノポーリエ(ベラさん預かり)	1500
	チェリコフ(バーリャさん預かり)	500
	マリノフカ(「移住者の会」)	1000
	ソーヌチカ幼稚園	300
	プリユート(子供の社会的避難施設)	300
	チェリコフ「幼稚園通園支援」(バーリャさん預かり)	500
		4100 ドル
救援物資購入資金	クラスノポーリエ	300
	マリノフカ	300
	チェリコフ	300
	ベリニチの「寄宿擁護学校」	300
		1200 ドル
「子ども元気」カンパ	クラスノポーリエ	1000
	マリノフカ	1000
	チェリコフ	1000
		3000 ドル

*9月5日のレート：1ドル=112.41円でした。



今年も感動！ 舞踏と詩の朗読

恒例の‘戦争はいやや！核なんかいらへん！フェスティバル in 長居公園’が21回目の今年も“子どもたちに核も原発もない未来を！”と題して9月18日に開かれました。私たち‘救援関西’は日本残留組と前日の17日朝に帰国したばかりのベラルーシ遠征組（サッカーW杯みたいやね）が集合して、いつものようにお店を出しました。「お疲れさま。時差ボケ大丈夫？」言葉だけはやさしいけれど、さっそくお土産に値段をつけてもらう人使いの荒さ。でもこれら産地直送のかわいいベラルーシグッズを見て多くの人が足を止め、説明を聞き、時々おサイフを開いてくださいます。やっぱりベラルーシグッズは効果的やね、活動のこと伝えるのに。



クッキー・ケーキにコーヒー・紅茶はお昼前にはあまり注文がなく、焦って行商していたら「出前は2時から」と注意を受けてしまい、売れ行きが心配でしたが、2時から若者が何度も行商に出てくれて完売。いつもみなさんに「カンパを！！」とお願いしていますが、スタッフも頑張っております。

そして、今年も舞台では‘救援関西’演劇部の長澤さんと長辻さんの‘慟哭」と‘人間をかえせ’の朗読をバックに西宮の小谷さんが踊ってくださいました。広島・長崎に原爆が投下されてから60年の節目にふさわしい選択で、舞踏と朗読の素晴らしいコラボレーションに引き込まれました。踊りと朗読はそれ自体で鮮烈な印象を与えながらも、同時にもうひとつ別の情景を浮かび上がらせるのです。戦後60年の年月がややもすると風化させかねない‘呼びかけても帰らぬ者たちへの思い’を踊りと朗読がまざまざと蘇らせます。その場にいなかった者が、戦争の無残をどれほど想像できるかが平和を護ってゆくための鍵のひとつだと思います。多くの人とこの感動が紡ぎだす想像を共にしたいと思いました。

小雪ちゃんが作ってくれたクイズ式の展示も楽しい出来上がりでした。が、この説明（というか客引き）のために広場の真中に立っているのはあまりにも陽射しがきつかったので、怠けてしまいました。これが今年の反省点。クイズにするなら景品を出すとか（スタッフが言いました。「正解者は救援関西‘秋のつどい’に無料ご招待！」んなこと誰が喜ぶか・・・？）来年は工夫が必要です。



救援関西‘演劇部’と小谷さん

最後になりましたが、フェスティバルの代表を務めておられる山科さんと、毎年毎年このフェスティバルを企画運営しておられる方々々に感謝のエールを送ります。

（アピールしたけれど下手くそやったなあ
と個人的に反省している たなか）

